

## 「18～19世紀における時計産業からみたジュネーヴと北サヴォワの関係」

尾崎 麻弥子

日時:2007年3月17日(土) 14時～17時  
会場:日本女子大学「百年館」3階 302会議室

### 1.問題の背景—ジュネーヴとサヴォワの関係

本報告で問題とした地域は、ジュネーヴとその周辺である。そもそもスイスにおける時計産業はジュネーヴで盛んであった金銀細工が元であり、ユグノーからの技術伝達によって発展したものであるが、18世紀になると近隣地域やジュラ地域へと広がった。それらの地域のほとんどがフランス語圏である。

ジュラ地域がスイスにおける時計産業の中心地としてジュネーヴと肩を並べるようになったのに対し、ジュネーヴもまた一大中心地として周辺にその勢力圏を広げていった。分業の進展とあいまって、周辺地域のなかに部品製造をおこなう農村があらわれた。現在のフランスのオート＝サヴォワ県の一部であるフォシニー地域、クリューズ盆地もその中の一つであった。

ここでジュネーヴとサヴォワの関係について簡潔に説明する。政治的には、1603年に(前年の奇襲攻撃の失敗を受け)サヴォワ公のジュネーヴ侵略への野望が挫折し、ジュネーヴは国際的に独立が認められた。しかしフランス革命の後1798年から北サヴォワとジュネーヴは近隣のジェクス地方の一部とともに、フランスのレマン県を形成することとなった。1814年のウィーン会議の結果ジュネーヴは旧領土を回復し、その後スイス盟約者団へ加盟した。一方サヴォワはサヴォワ公がその位を得ていたサルデーニャ王国へ復帰するが、1860年にフランスへ割譲され、併合されることになった。

本報告では、こういった近隣に存在しながら政治的に別々の道を歩むこととなったジュネーヴと北サヴォワとの関係について、時計産業の分業を通して、18世紀から19世紀にかけてどのように変化していったかを検討する。その際、技能、通商・関税、企業間関係に着目する。

### 2.18世紀

前述の通り、ジュネーヴの時計産業の発展により周辺地域へ部品製造が広まった。しかし、フォシニーのクリューズ盆地において時計産業が広まった地域は、ジュネーヴから一定の距離をもった山岳地帯の村々であった。なぜこの地域に広まったかについては、3つの理由が考えられる。第一に、移出民との関係である。クリューズ周辺は、山岳地帯の相対的過剰人口から、行商人などの移出民が多かった地域である。行き先はジュネーヴを経由してアルザスや南ドイツであった。そうした移民の一人のクロード・バラルーがニュルンベルクからの帰りにジュネーヴで技術を取得して、北サヴォワで工房を開いたのが時計産業の起こりであるといわれている。第二に、在来産業との関係である。この地域には17世紀初めからブリキ加工業、真鍮製家庭用品製造業があり、ブリキ・真鍮製の家庭用品を売りつつ修繕をおこなう遍歴金物屋の存在も多く記載されている。こうした金属化工業の存在が、時計部品製造に結びついたのであると考えることができる。最後に、農業との関連である。ジュネーヴにより近い地域は比較的標高が低いため冬の気温も高く、土地が肥沃で、穀物生産・牧畜が盛んであり、むしろジュネーヴに対して食糧供給地の役割を果たしていたと考えられる。それらの食糧供給地はアルヴ渓谷にそった街道を通じてジュネーヴとの頻繁な行き来があったと考えられる。こうしたジュネーヴとの関係の延長として、農業の盛んでなかったクリューズ周辺の山岳地帯の村々において、ジュネーヴからの時計産業の技術が伝播し、部品製造が農閑期の副業として開始されたのだと考えることができる。

18世紀において、ジュネーヴとの関係は非常に密なものであった。ギョフオンの研究によると、ジュネーヴ人の商人＝組立工(établisser)がフォシニーの部品製造者とジュネーヴの時計工、ヨーロッパ全体に広がった顧客をつないでいたという。また、フォシニーにはジュネーヴからほとんど毎日メッセンジャーが派遣され、注文内容が伝えられ、材料・道具の前貸しがおこなわれていた。

### 3.18世紀末～19世紀初めの危機

19世紀初頭に北サヴォワにおいて時計産業が消滅した原因は大きく分けて2つ存在する。一つはジュネー

ヴの時計産業自体に対する需要が減ったこと、そしてもう一つはその結果、ジュネーヴの中で部品を製造しようとする企業がでてきたことであった。

ジュネーヴ時計産業が危機に陥った理由は、アントニー・バベルによると、フランス革命の影響でフランス王族・貴族という顧客を失ったこと、それに加えてオーストリアのヨーゼフ2世もまたジュネーヴの時計を買わないよう配下の貴族に指示したことなどにより、需要が減少したことであった。このあおりを受け18世紀末からジュネーヴの多くの企業が倒産し、慈善団体の救済を受けた。リアンヌ・モテューヴェヴェールはこの危機によってジュネーヴ市の経済が深刻な打撃を受けたことに対して、「時計産業に偏りすぎたジュネーヴ経済自体の問題であった」と指摘している。また、バベルは別の論文において、この時代においては注文が少なく仕事が少なかったため、部品の製造へ転換しようとしたジュネーヴの企業が存在したことを指摘した。それまではジュネーヴの時計工は伝統的生産方法にこだわり機械を使用しようとしてこなかったが、ヨーロッパ製造業全体に広がる機械化の流れを受け、機械を使用することによって、迅速かつ大量にフォシニーやジュラの競合他社より安価に未完成ムーブメントおよび部品の製造を可能にしようという試みがなされるようになった。このことがフォシニーにとっては注文の激減となり、フォシニー時計産業は壊滅的な打撃を受けた。ジュネーヴの時計産業は1830年代に完全に回復するが、北サヴォワにおいてはまだ時計部品製造は停滞していた。ちょうどこのころフォシニー全体で山火事が頻発し、30年代終わり～40年代に各市町村で建て直し運動がおこなわれた。これに乗じて時計部品製造に関しても改良・復興への動きがおこり、学校の設立へと結びついた。すなわち、火事による痛手を取り戻すため各地で市当局、サルデーニャ王に請願をおこない、パリから技術者を招聘した。その結果、クリューズ(1848-)などで時計学校が成立し、徐々に時計部品製造者の数が回復した。

#### 4.19世紀末～20世紀初頭

具体的な企業の記録ノートおよび書簡の検討において、ジュネーヴのみではなくジュラとの取引の例が少なからずみられた。さらに、フランス(パリ)、北イタリアとも取引の例があり、ある程度の「多様化」が実現していたことがあきらかになった。

ただし、ジュネーヴとフォシニーは「フリー・ゾーン」によって結び付けられており、そこから時計産業もジュネーヴとの取引において利益を得ていたと考えざるを得ない。このフリー・ゾーンによるジュネーヴと北サヴォワの結びつきは、中世から綿々となつてきたジュネーヴと北サヴォワのあいだの都市―農村関係、すなわちジュネーヴの北サヴォワに対する食糧依存関係の流れからきたものである。すなわち、18世紀の北サヴォワにおける時計産業成立とジュネーヴとの結びつきの「必然性」の流れである。

ただし、その関係はもはや18世紀におけるものとは同一ではなかった。その理由は、全ヨーロッパ的な目録の入った宣伝用冊子の存在(があり、そのようなメディアを通して比較的遠方からも条件さえよければ直接注文することが可能になったということである。手紙による注文、見本のやりとりの要求、事細かに条件を述べ可能であれば採用すること、不備があった場合には「やり直し」を要求できること、自社の秘密をもらさないよう誓約させることなどにより、フォシニーの諸企業は、宣伝・売買を「ジュネーヴの商人」に頼らず、みずからおこなうことが可能になり、ある程度市場を拡大することができた。

#### 5.補遺～1914年以降～

第一次大戦の勃発により、フランス国家からの軍事物資需要により、クリューズ周辺では武器製造へ転換し、戦後においても時計部品製造へは復活せず、フランス国内の機械産業の部品製造へ転換することになった。この機械部品製造産業は現在まで続いている。